
「また明日」の代わりに

「あいかわらずの」

第2稿 251218

【人物一覧表】

陽子（ようこ） 女性 20歳

慎太郎（しんたろう） 男性 20歳

1	2
<p>実景点描</p> <p>人気がない、終末の街の実景。</p> <p>広い画というより狭い画。終末からは逃げられないと感じたい。</p> <p>陽子M 「朝はいつもと同じ、ベーコンとたまごのホットサンド。いつものダージリンティー。お気に入りの靴を履いて出かけた。朝の星座占いは、さすがに今日はやってなかった。たぶん今日はみんな1位で、みんな12位だろう」</p>	<p>交差点</p> <p>赤信号を待っている慎太郎（20）。</p> <p>車は1台も通らない。寂れた標識、寂れた信号機。</p> <p>信号を待つ足元は、そわそわ急いでいて。</p> <p>慎太郎M 「高校生の頃、毎日食べていたパンが復刻した。せつかく食べたのに、なぜ毎日食べていたのか思い出せない。</p>

3

朝日が差し込む場所

母親に手を引かれていた頃、あの角には、おばあちゃん
が座っているタバコ屋があつたなと思ひ出す。いつの
間になくなったかも、思ひ出せない」
信号は青に変わり、慎太郎は駆け出す。
無人の交差点。

待ち合わせ場所にひとり佇む陽子（20）。

朝日はキラキラしていて、どこか不自然にさえ感じ
る。

陽子M「いつもの今日は、いつも通りじゃなくて」

慎太郎M「今日は、今日しか来ない。それでも僕らは」

タイトルT「あいかわらずの」

遠くを見ている陽子。

慎太郎「陽ちゃん！」

慎太郎の声は明るかった。

陽子「遅いよ、慎ちゃん！」

陽子もやっぱり、明るい声色だった。

慎太郎「信号待ちが長くてさ」

陽子「いつもそれじゃん、走って来てよ」

慎太郎「いつも急に呼び出すのは陽ちゃんでしょ？」

陽子「だって、思ったより天気だったんだもん」

慎太郎「予報悪かったつけ？」

陽子「ううん、予報なんてもう出てないよ」

慎太郎「あ、そっか。どこ行く？」

陽子「うーん」

慎太郎「最後だしなあ」

陽子「カレーパン食べない？」

慎太郎「また？最後だよ？」

陽子「最後だから、好きなもの食べたいじゃん」

慎太郎「それはそうだけど……せつかくなら特別なものにしな

	4	
	町のパン屋・表	<p>陽子「特別なものって？」</p> <p>い？」</p> <p>慎太郎「うーん、夜景の見える、高級フレンチ、みたいな」</p> <p>陽子「そんな店、もうやってないって」</p> <p>慎太郎「えー、そうかあ」</p> <p>陽子「パン屋もやってるかわからないけどねー」</p> <p>歩き出すふたり。</p>
		<p>カレーパンを食べるふたり。</p> <p>慎太郎「最後、カレーパンかあ」</p> <p>陽子「なに？ 文句ある？」</p> <p>慎太郎「だって高校のときから死ぬほど食べてるよ？」</p> <p>陽子「カレーパン嫌いだったもんね」</p> <p>慎太郎「有り得ない！ってこのカレーパン教えてくれたんだよね」</p>

陽子「そう、購買のカレーパンだけ食って嫌いとか言ってるんじゃないー！ってね」

慎太郎「でも、最後お？」

陽子「カレーパン食べ行こ！っていつも言ってたのは慎ちゃんじゃん」

慎太郎「それはさあ……」

陽子「好きだったでしょ？」

慎太郎「……好きだったよ？」

ふと、ふたりはバツチリ目が合う。

陽子は即座に逸らす。

陽子「でしょ？ だから、カレーパンで正解じゃん」

慎太郎「……そうだね」

陽子「そうだよ」

慎太郎「いつもの、カレーパンに感謝」

陽子「（笑って）なにそれ」

5

大学・広場

ガランとした広場。

ふたりがやってきて。

陽子「最後が、毎日来てる場所お？」

慎太郎「俺、今年の学祭楽しみだったんだ」

陽子「ふうん。今年のゲスト誰だったわけ？」

慎太郎「違うよ！ 陽ちゃんのミスコン！」

陽子「ねえ！やめて！ ゴリ押しされただけだから！」

慎太郎「知ってる。すごい文句言ってた」

陽子「……それが楽しみだったの？」

慎太郎「うん。一生イジってやろうかなって」

陽子「ねえ！最低！」

慎太郎「だから、できなかったミスコンの再現やろうよ」

陽子「ねーえ、だるいって」

慎太郎「今年のミスキャンパスを発表します！ドコドコドコ

…ジャーン！ エントリーナンバー2！陽子さんです！

きゃ?!!?」

陽子「(笑って) やった」

慎太郎「おめでとう?」

陽子「みんなありがとう」

慎太郎「では、今の心境をお願いします!」

慎太郎、司会者がエアマイクを陽子に渡す。

陽子、泣いてるフリをして。

陽子「ここまで応援してくれた皆さんのおかげです!まさか、

私が選ばれるなんて……」

慎太郎「そうですね……まさかアピールタイムで大食いを披露するとは……」

陽子「コラ!そんなわけないじゃん!」

慎太郎「陽ちゃんの一番のアピールポイントでしょ?」

陽子「ミスコンで大食いするかっ 女の子らしいことアピールするもん!」

慎太郎「陽ちゃんの女の子らしいところ?」

陽子「えーっと……」

6

高校・校門前

慎太郎「(笑って) えーっと？」

陽子「ええー……？ もう！ ばか！」

慎太郎「あー今年開催できてても、きつとミスにはなれなかった

なあ」

陽子「なんだと！」

二人ともが笑って。

ふざけながら去っていく。

校門にはバリケードがされており、中には入れない。

閉じ切った校舎の窓。明かりは点いていない。人気

はない。

陽子「入れないや」

慎太郎「さすがにね」

陽子「体育祭のときの慎ちゃんの真似したかったのになあ」

慎太郎「ねーえ！ それいつまでイジるつもり？」

陽子「ん？一生」

慎太郎「じゃあ俺も卒業式の話、一生イジるから」

陽子「ねえ！反則！」

慎太郎「卒業生代表……」

陽子「ねえ！」

慎太郎「一生笑えるんだよな」

陽子「一生笑ってろよ」

慎太郎「最高の人生じゃん」

陽子「……明日には笑えないよ」

慎太郎「明日だって笑ってるよ」

陽子、慎太郎をどつく。

慎太郎「痛いって」

陽子「ばか」

慎太郎「え、ごめん」

陽子「……ばか」

慎太郎「……」

陽子、振り向いて、去って行く。

慎太郎、すぐに追いかける。

7

公園

慎太郎「陽ちゃん、ごめん」

陽子「……」

慎太郎「ごめんってば」

陽子「……慎ちゃんのばか」

慎太郎「……ごめん」

陽子「……」

陽子、立ち止まる。再び、慎太郎をどつく。

慎太郎「痛いって」

陽子「……明日とか、言うなよ」

慎太郎「……陽ちゃんが言った」

陽子「……一生とか、言うなよ」

慎太郎「それも陽ちゃんが言った」

陽子「……いつも通りしないでよ！」

慎太郎「……」

陽子「今日が最後なんだってば」

慎太郎「うん」

陽子「世界が、なくなっちゃうんだってば！」

慎太郎「うん」

陽子「……死んじゃうんだってば！」

慎太郎「うん」

陽子、その場にしゃがみこむ。

陽子「……」

慎太郎「……」

慎太郎は、陽子の肩に手を置く。

陽子「……いなくならないでよ」

慎太郎「ずっといるよ」

陽子「嘘！全部消えちゃうんだって！」

慎太郎「俺の中に、ずっといる」

陽子「私の中にだっているよ！」

慎太郎「……いつも通りしてたら、いつも通り会えるよ」

陽子「嘘」

慎太郎「陽ちゃんから電話が来る」

陽子「……慎ちゃんが遅刻してくる」

慎太郎「陽ちゃんが、ばか、って言う」

陽子「一緒に、並んでカレーパン食べて」

慎太郎「一日中くだらない話して」

陽子「一日中、笑ってる」

慎太郎「別れ道で立ち止まってしゃべって」

陽子「私が見えなくなるまで、慎ちゃんは手を振って」

慎太郎「お互い切らないから何時間も電話して」

陽子「気付いたら夜中で」

慎太郎「俺がまた、寝坊する」

陽子「また、慎ちゃんは遅刻してくる」

慎太郎「俺は、ごめん、って笑ってて」

陽子「私が、ばか、って笑って」

慎太郎「文句言いながら、またカレーパンを食べる」

陽子「……いつも通りだ」

8

教会

慎太郎 「それじゃ、ダメ？」

陽子 「私でいいの？」

慎太郎 「陽ちゃんだけだね」

陽子 「……調子いいなあ」

慎太郎 「世界最後の日、笑って過ごせる人」

陽子 「……感謝してよね」

慎太郎 「陽ちゃんこそ」

陽子 「……うん、ありがとう」

夕日が差し込む教会。

ふたりは座っていて、しっかりと手を繋いでいる。

慎太郎 「次会うときは、もっとモテモテだから」

陽子 「え？ 慎ちゃんが？」

慎太郎 「はあ？ 俺は今でもモテモテですけど？」

陽子 「私はー、超美人で、スタイル良くて、メイクうまくて、

少食で」

慎太郎「それ、もう陽ちゃんじゃないじゃん」

陽子「はあ？」

慎太郎「大食いでいてくれないと」

陽子「そこ？」

ふたりの笑い声が響いている。

影が、長く長く伸びて、一瞬、影がなくなる。

風の音が響き始めて、徐々に大きくなる。暗転。

了